# 1 月 30 日のメッセージ

聖書：マルコによる福音書　1：　40 – 45

## 「清くなれ」

人生の岐路を迎えるたびに私たちは絶えず、「誰に従うのか」という問題に立たされています。「何とか幸せをつかみ取りたい」という願いをもって、しっかりと選んでいる、はずです。しかし、「わたしに従いなさい」(マルコによる福音書 1:17)と言われた方に従っているつもりが、全然別のものにすがっていることもあるでしょう。裾にすがってみれば全く違う顔だったということもあるでしょう。

自分さえ良ければ、という邪な思いが私たちの目を曇らせます。自分の見たいものを見たいようにだけ見てしまう、それが私たちを正しい道から離れさせるのです。

その意味において、ここに登場する「重い皮膚病を患っている人」は正しい判断をしたと言えるでしょう。本当にすがるべき方のところに足を運び、本当に願うべきことを願ったからです。

この場面、私たちはとかく「病が癒された」という部分に目を向けがちですが、実はここで大切なのは、この人の願った「清くおできになります」(マルコによる福音書 1:40)という言葉です。もちろん、病が癒されることも望んでいたでしょうが、第一に願ったのは神の前に正しくあることでした(「神よ、わたしの内に清い心を創造し／新しく確かな霊を授けてください。」詩編 51:12)。当時の常識では、病を得ていること＝神の道から逸れていることでしたから、何よりもまず正しい道に戻りたいと願ったのです。

そして、イエスはその願いにお応えになり、「よろしい、清くなれ」と命じられると、希望通り、確かにその通りになりました(マルコによる福音書 1:41-42)。これは、悪い状態のものを良くしたというよりも、むしろ、そもそも良いものであったはずの人間の体を、正しく元の状態に戻されたと言えるでしょう(「神はお造りになったすべてのものを御覧になった。見よ、それは極めて良かった。」創世記 1:31)。

そもそも、人間の体は神の栄光を表す器であり、そのために神は土の塵に過ぎない体に命の息を吹き入れられたのです(「主なる神は、土（アダマ）の塵で人（アダム）を形づくり、その鼻に命の息を吹き入れられた。人はこうして生きる者となった。」創世記 2:7)。パウロはこのことを、「人間の体は神からいただいた聖霊が宿る神殿だ」と言い換えています(「知らないのですか。あなたがたの体は、神からいただいた聖霊が宿ってくださる神殿であり、あなたがたはもはや自分自身のものではないのです。」コリントの信徒への手紙一 6:19)。全ては神の願いの下にあり、全ての人間は神の思いを実現させるための存在なのです。だとすれば、その体が生み出すものは全て主のものである、と言えます(「わたしたちの神、主よ、わたしたちがあなたの聖なる御名のために神殿を築こうとして準備したこの大量のものは、すべて御手によるもの、すべてはあなたのものです。」歴代誌上 29:16)。

ところが、傲慢な私たちはつい、自分の手で勝ち得たものだと勘違いします。そしてまた邪な思いにそそのかされて、神の道から離れて行ってしまうのです。邪に目のくらんでいる私たちをイエスは常に案じておられます。いつでも立ち帰るのを待っておられます。「清くなれ」との声を他人事として聞くのではなく、自分に向けられた言葉として聞きましょう。今一度、自分を取り戻し、イエスに従い、共に一歩を踏み出しましょう。